学校教育目標 ： 未来に向かい 豊かな心で たくましく生きる生徒

23.4°

～遥かなる夢と ロマンを求めて～

札幌市立厚別北中学校　学校だより　No. 6
令和８年 10 月 29 日発行

厚北文化芸術祭の様子





第６回厚北文化芸術祭を終えて

生徒会顧問

今年度は 10 月２日（金）に第６回厚北文化芸術祭が行われました。テーマは「厚北ワールドカップ～厚北の快進撃～」です。体育館では、開会式を皮切りに、各学年の劇、1，2 年生のステージ、文化系部活動の発表と、生徒会役員と３年生による閉会式の発表がありました。各部門が当日のためにアイディアを出し合い作り上げたものは、観る人に笑顔と感動を与えてくれました。ワールドカップのように表舞台に出ていても出ていなくとも、チームとして支え合ったからこそ、この文芸祭が素晴らしいものになったと感じました。

また、各学年ごとの装飾と美術部の展示では、校舎内に彩を添えており、丁寧に制作された作品からは、完成に至るまでの時間すら感じることができました。装飾作品の一部はまだ展示しておく予定ですので、保護者の皆様にも期末懇談などの機会に、是非見ていただけると幸いです。

昨今では文化的行事が少なくなっている中、生徒の力が結集し活躍する生徒会行事がある厚北を誇りに、そして大切にしていってほしいと思います。次年度も工夫を重ね、よりよき活動となることを願っています。

＜やって良かった劇裏方＞　　**１年**

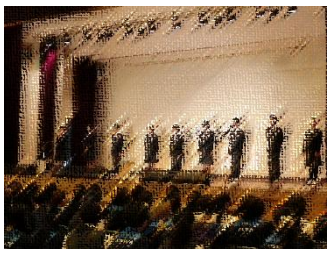
僕の役割は、劇の裏方でした。劇のみんながまじめに練習している姿を見て、裏方だからと言って全力を出さないわけにはいかないと思い、僕も全力でがんばりました。最初から最後まで楽しい文芸祭でしたが、苦労したことが二つあります。

１つ目は、計画と準備です。１年生の劇のテーマは文芸祭までに準備が間に合わなくて…です。本作品の最後に「文芸祭の準備は計画的に」とありましたが、僕たちにも言えることだなと深く思いました。なぜなら、スライドを流す担当だって、本番の２日前にやっと決まり、流す練習だって２回して、本番前日に家で夜おそくまで必死に練習することになってしまったからです。その練習は、クラスルームにある音楽にあわせて、１分 40 秒くらいで終わるようにスライドを流すことでした。それに、１分 40 秒くらいにおさめるのもなかなか大変で、何十回も練習し、やっとあわせることができました。

２つ目は、スライドの作り方です。スライドを作るときに、どんなスライドにしようか仲間と話しみんなが笑ってくれるようなスライドにしようとなりました。役者たちの面白い写真や、ポーズをとろうと思い、どんなポーズにしたら面白くなるのかをみんなで話し合ったときに苦労しました。

最後に、僕はこの文芸祭を通して、自分に与えられた任務を全うする強い気持ちと、みんなと協力することを学びました。１人で劇を作るよりも、たくさんのアイデアが集まるので、よりすばらしい作品になることを知りました。









＜百感の思い出＞ **２年**

私は厚北文化芸術祭でたくさんの感情を教わりました。

まず、準備でのことです。私の担当は劇のキャストでした。私のセリフは短く、少ししか出ません。だからって手を抜いてはいけません。しかし、そのときの私はそこまで真剣に考えていませんでした。そんな軽い考えだったからか、初めて台本を見ずに言ったとき、私はセリフを間違えてしまいました。みんなが私のことを軽蔑した目で見ているのではないかと思うと怖くてたまりませんでした。他の人がセリフをすらすら言えているのを見て、自分に腹が立ちました。もっと緊張感をもって何度も練習すればよかったのにという後悔で胸がいっぱいでした。ですが今、過去の出来事を悔やんでもしかたがないと思い、次に繋げることを考えました。セリフを覚えるだけでなく、大きな声で感情を込めて言うこともできるようにならなければ、と考えた私は家で自分の声を録音し、何度も練習しました。その結果、次の SP のでは完璧に言えました。さらに、役になりきって物語を作り上げる楽しさも感じました。

次に文化祭当日のことです。どの学年もキラキラしていて、笑いや拍手で空気が揺れているように感じました。そして劇でみんなの前に出たときはとても緊張しました。しかし、自分のことも、みんなのことも信じて最後までやり切りました。劇が終わると、張り詰めていた気持ちから解放され、回りの音が一瞬にして耳に飛び込んできました。その時の達成感や安堵感は忘れられません。

このように文芸祭で、私はたくさんの感情に出会いました。

＜スポットのあたらないスポットライト＞ **３年**

「厚北ワールドカップ～厚北の快進撃～」。これは今年の厚北文化芸術祭のテーマでした。これには、一人一人が主役となり輝いていこうというような意味が込められています。そんな今年の厚北文化芸術祭で私は、第一希望である開会式部門に入ることができました。最初は、最後の厚北文化芸術祭となるので悔いの残らないようステージに立ち、パフォーマンスをしようと思っていました。ですが、去年劇の裏方をしたときのやりがいを思い出し、今年も裏方をしたいと思いました。私は裏方の中でも当日とても重要となっていくスポットライトをすることになりました。最初は２人でする予定だったのですが１人で担当することとなり、照明を切り替えるタイミングなどとても難しく本番できるかとても不安になりました。そんな中体育館リハの際、初めて照明を触りました。思った以上に難しくとても大変な仕事でした。また照明の色や切り替えの早さなどが開会式の質にとてもかかわっていくと感じました。そこで私はそれぞれのグループにどのような照明の色にしてほしいか、ききこみをし、メモをして本番に備えました。そして、本番緊張しながらも準備してきた自分を信じました。本番ミスをすることなく照明をすることができ、最高に盛り上がる開会式にできたと思います。私は今年スポットのあたらないスポットライトを担当しましたが、改めて裏で働く人の大切さを知りました。






≪大会・コンクール等　結果報告≫

2026 「宇宙の日」絵画コンテスト中学生部門　**最優秀賞　２年生１名**

2026 北海道神宮写生大会　**宮司賞　２年生１名**　**金賞　２年生１名**　**銅賞　２年生１名**
入選　２年生２名

令和８年度「心の輪を広げる体験作文」中学生の部　**最優秀賞　１年生１名**　**審査員賞　２年生１名**

ピアノ ピティナ・ステージ(後援：文部科学省)　**継続表彰　３年生１名**